

研究発表要旨

蜜蜂とアリスタエウス

——ウエルギリウス『ゲオルギカ』における農業の担い手たち——

上野 由貴

ウエルギリウスの『ゲオルギカ』は農業を主題とする叙事詩であり、その第4巻は養蜂を扱っている。そして第4巻の後半には、蜜蜂の再生技術であるブーゴニアの起源譚として「アリスタエウス物語」(4.315-558)が語り込まれている。しかし、この物語と作品のそれ以前の部分との繋がりについては、その連続性や一貫性を否定する意見も含めて多様な解釈があり、物語の主題や作品における役割についても見解は一致しない。そこで本考察では、「アリスタエウス物語」が蜜蜂の喪失と回復の過程を描いている点に改めて注目し、その蜜蜂と人間の農夫との共通点・対等性を考慮に入れることによって、物語が作品全体の主題と結びついていることを示す。

農夫にとって蜜蜂は、まず第一に蜜を得るために飼育する動物であり、第4巻では養蜂家が行うべき様々な蜜蜂の世話が語られている。しかし一方で、第4巻で描かれる蜜蜂が、他の動物にはない特殊な性質を与えられていることもまた明らかである。4.149ff.で叙述されるその性質は極めて人間に近く、それに基づいて行われる蜜の獲得・保持に関わる労働の様子は、第1巻で語られる人間の農夫のあり方との間に多くの共通点を持っている。1.121ff.で人間は、ユピテルの時代に自動的に手に入らなくなった実りを手に入れるべく、厳しい農業の道を課されたと語られている。一方の蜜蜂も、やはりユピテルの時代に自動的に手に入らなくなった蜜を求め、ユピテル自身に与えられた性質に従って労働に勤しむ生き物である。そのように考えると、蜜蜂はユピテルの時代において、人間の農夫と対等な位置にある農業の担い手としても理解できる。

「アリスタエウス物語」の主人公アリスタエウスが農夫を代表する人物であることは、神話伝承の伝統だけでなく、物語そのものの叙述からみても間違いないと考えられる。そして物語では、アリスタエウスの蜜蜂の喪失が、彼の全農業分野における荣誉と業績の喪失と等しい絶望をもたらすものとして表現され、更に物語内物語(4.457-527)で描かれるエウリュディケー及びオルフェウスの死の原因を作ったアリスタエウスの重大な罪に見合う罰とされている。こうした蜜蜂喪失の重大さの強調は、蜜蜂の農業の担い手としての役割を考慮に入れるならば、妥当なものとして理解できると考えられる。その後アリスタエウスは、農夫としても不可欠なものである神々への敬虔さを示し、償いの犠牲を果たすことによってその蜜蜂を回復する。そして、その経験を *ars* として確立する。

「アリスタエウス物語」は、農夫の代表者による荣誉の回復や、農業に不可欠なものである *ars* の一つの発明を語る物語であるだけでなく、ユピテルの時代にあるべき農業の担い手の回復を描く物語でもあった。この物語は、作品の主題である農業との間に確かなつながりを持ち、作品の最後に収められるにも相応しい内容を備えた物語であるということが出来る。

プラトンの探究方法

——『メノン』86C-89Cにおけるヒュポテシスの方法を中心に

福田宗太郎

『メノン』『パイドン』『国家』といったいわゆる中期対話篇において、プラトンの哲学的探究方法として研究者の注目を集めるのはヒュポテシス（仮設）の方法と呼ばれるものである。ヒュポテシスの方法はヒュポテシスを設定してそこから帰結を導くことで探究をすすめる方法だと一般的にみなされているが、それをプラトンが理想とする哲学的問答法（ディアレクティケー）の中核をなす方法とみなし初期にみられるいわゆるエレンコスの方法と対置させて肯定的に評価する研究者（e.g. Robinson(1953), *Plato's Earlier Dialectic*, 2d ed., Vlastos(1991), *Socrates, Ironist and Moral Philosopher*）がいる一方で、実際には‘second best’な方法であり劣っているとみなす研究者もいる（e.g. Gonzalez(1998), *Dialectic and Dialogue, Plato's Practice of Philosophical Inquiry*）。しかしそもそも個々の対話篇におけるヒュポテシスの方法の具体的なあり方が十分に明らかにされているとは言い難い。ヒュポテシスの方法がはじめて提示される『メノン』において、この方法は「徳は教えられ得るか」という問題に答えるために導入されていると見なされてきたが、一つ目の議論において何が仮設として設定されているのかという問題は解釈者たちを長く悩ませてきた。『メノン』におけるヒュポテシスの方法は、アリストテレスが『分析論前書』で取り上げる還元法との関連が指摘され、古くは Bluck(1961; *Plato's Meno*)が、最近では Wolfsdorf(2008; ‘The Method ἐξ ὑποθέσεως at *Meno* 86e1-87d8’)が還元法を手がかりにヒュポテシスの方法を考察しているが、どちらも不十分なものであるように思われる。本発表の目的は、仮設の内容を明らかにした上で、還元法を手がかりにして、ヒュポテシスの方法が具体的にどのように用いられているのか明らかにすることにある。

Bluck は一つ目の議論におけるヒュポテシスは「徳は知である」という命題だとみなした上で、仮設は直観的な仕方で導入されていると主張している。「徳は知である」という命題が仮設であるという解釈に対しては異論も提出されているが（e.g. Zyskind & Sternfeld(1976), Wolfsdorf）、テキストに基づいて Bluck の解釈を擁護することを目指す。しかし仮設が直観的な仕方で導入されているという点については、設定すべき仮設が明らかでない場合には還元法によって導入されていることを明らかにする。Wolfsdorf はヒュポテシスの方法が還元法そのものであるかのように主張しているが、実際には還元法はヒュポテシスの方法の一部であることを論じる。ヒュポテシスの方法には仮設を設定するという側面と、設定した仮設から帰結を導くという二つの側面がある。還元法はそれら二つの側面のどちらにおいても登場するが、仮設による方法は単に問題を還元することにとどまるのではなく、還元法の助けを借りつつ帰結を導き問題の解決をはかる方法であることを明らかにしていく。最後に以上のヒュポテシスの方法についての理解が、『パイドン』においてもあてはまることを論じる。

アリストテレスの『分析論後書』（以下『後書』）A 卷第 2 章は論証の原理（ἀρχή）について論じられた章である。A 卷第 2 章の 71b16-72a14 では原理の持つべき諸性質が、72a14-24 では原理の種類がそれぞれ論じられている。その 72a14-24 では原理が公理（ἀξιωμα）と措定（θέσις）に区分され、さらに 72a19-24 ではその措定も基礎措定（ὑπόθεσις）と定義（ὀρισμός）に区分される。本稿の目的は、72a19-24 の検討を通じて基礎措定と定義について考察することで、それらが論証の原理としてどのように機能しているのかを探ることにある。

72a19-24 では基礎措定と定義が以下のように記述されている。まず、「矛盾対立のどちらか一方を容認するもの」が基礎措定として規定されており、その例として「或るものがある」とか「或るものがあらぬ」のようなものが挙げられている。また、文脈上「単位がある」も基礎措定の例であると考えられる。次に定義については、「そうでないもの〔基礎措定ではないもの〕を定義と呼ぶ」と言われており、基礎措定とは異なるものとして規定されている。定義の例は、「単位とは量において分割を許さぬものである」のようなことである。この定義は「単位とは何であるか」という問いに対する答えとして理解されることができよう。

以上のように 72a19-24 の内容の大枠を理解することは可能だが、実際にこの二つがいかんして論証の原理たりえるのかを理解することは難しい。本稿では基礎措定と定義の内実をそれぞれ探ることによって、目的の達成を目指す。

まず τὸ εἶναί τι によって表される基礎措定については、大部分の論者が、細かい内容の違いはあれ、存在を含意するものと解している（Ross (1923), Tredennick (1960), Aquinas (1964), 加藤 (1971), McKirahan (1992), Goldin (1996), Charles (2000), etc.）。しかし、τὸ εἶναί τι について、「或るものが何かである」というように述語的規定を持つという解釈をとる人々もいる（Gomez-Lobo (1977), 高橋 (2014)）。本稿は前者に与するが、その内実を明らかにする必要がある。

また、τί ἐστι によって表される定義については、Hintikka (1972) のようにいわゆる「名目的定義」を意味すると解する人も、Landor (1981) のように論証の前提命題として機能する「完全な定義」と解する人もいる。このいずれの解釈も不十分であることを示すことで、本稿はここでの定義に異なった位置づけを与えることを目指す。

以上の問題に取り組むため、本稿では『後書』A 卷の他のテキストが参照される。中でも、A 卷第 7 章 75a42-75b2 と第 9 章 76a11-13 で提示される「基体としての類」の考え方は重要である。この参照から、基礎措定はそれぞれの個別学にとっての「基体としての類」の存在を措定するものであり、定義は基礎措定を前提として成り立つ意味の了解である、ということが明らかとなる。

また、72a19-24 と同じく論証の原理を考察している 76b35-77a4 との整合性が確認されなければならない。両テキストの関係については諸説あるが、本稿の解釈が無理なく 76b35-77a4 に当てはまるのであれば、その妥当性は示されたことになるだろう。

後 2 世紀リュキアにおけるコイノンの公職制度とローマ

岸本廣大

古代ギリシアにおけるコイノン(ポリスなど複数の共同体から構成された、現代の連邦国家に類する共同体)の研究は、従来の政治史・制度史的な枠組みを超え、関連諸分野の研究成果も取り入れて、大きな進展を見せている。例えば、Emily Mckil の著作 (*Creating Common Polity. Religion, Economy, and Politics in the Making of the Greek Koinon*, Berkeley, 2013) は、宗教的・経済的な側面にも注目してコイノンが形成される過程を考察し、古代ギリシアの多くのポリスがコイノンに加盟していた理由の説明を試みた。また、Peter Funke と Matthias Haake が編纂した論文集 (*Greek Federal States and Their Sanctuaries*, Stuttgart, 2013) は、各コイノンの形成に寄与した重要な聖域を扱っている。このような、主にコイノンの形成に焦点を当てた研究の活況が様々な新しい知見をもたらす一方、コイノンの「その後」にはあまり関心が払われていない。多くの研究の射程はあくまでも前 146 年のアカイア戦争での敗北までであり、それによる独立の喪失という政治的な画期が依然重視される。しかし、政治的な側面以外に注目することで進展をみせた現在のコイノン研究が政治的な前 146 年を区切りとし、その後の時代を等閑視することにあまり説得力はない。むしろ、「その後」も視野に入れてこそ、これまでの研究成果がより大きな意義を有するのではないだろうか。

以上の研究状況に鑑み、本報告ではローマの支配下で存続したコイノンがどのような制度を有していたのかを考察する。その際、小アジア南西部のリュキア地方に形成されたコイノンが興味深い対象となる。前 3 世紀頃から発展したと考えられるリュキアのコイノンは、ヘレニズム時代に様々な政治勢力から干渉を受けていたが、前 2 世紀半ばにローマの保護下での自由を獲得し、後 43 年の属州化に至るまで、ローマと友好関係を維持した。ローマとの敵対関係を通じて、その支配下に組み込まれたギリシア本土のコイノンとは異なる経緯をたどったために、必ずしも前 146 年を画期としないう本報告の考察に適する。

報告者は以前に「連邦認識」という観点からリュキアのコイノンについて考察を行った(第 12 回古代史研究会大会、2013 年 12 月)が、本報告では後 2 世紀のオプラモアスの墓碑(*Tituli Asiae Minoris II, 905*)を主たる史料として、コイノンの公職に着目する。この史料が Christina Kokkina によって新たに校訂されたこともあり (*Die Opramoas-Inschrift von Rhodiapolis. Euergetismus und soziale Elite in Lykien*, Bonn, 2000)、最近では、リュキアのコイノンの公職、特に祭司職について精力的な研究がなされている (ex. Denise Reitzenstein, *Die lykischen Bundespriester. Repräsentation der kaiserzeitlichen Elite Lykiens*, Berlin, 2011)。その新たな知見を踏まえながら、本報告では、オプラモアスの墓碑におけるコイノンの公職の描写のされ方、およびその中でローマの役人の位置づけを考察する。それにより、「その後」のコイノンの制度が、ローマの支配という現状に沿って変化しつつも、従来の枠組みの維持を意図していたことが示されるであろう。

地震の地裂による死の恐怖への応答と死そのものの受け入れ

——セネカ『自然研究』6巻の表現手法——

山口京一郎

セネカ『自然研究』6巻は、62年のカンパニア地震の直後（62年-64年頃）に記されており、自然学的な地震考察を行うと同時に、震災により脅える人々の恐怖を取り除くことも目指している。本発表では文化史的に災害を捉える観点からその後者の側面に注目し、地震での死、とりわけ地裂（地割れ、大地の裂け目）から地下へ落ちて死ぬことへの恐れという具体的な恐怖に対して、それを恐れるべきではないとする説明・説得から最終的には死そのものの受け入れの勧奨へと至るその展開と表現手法を文学的に考察する。なお、地裂は震災に際して人々が恐怖する主な対象のひとつであった。

セネカは、震災により脅える人々を慰めて恐怖を取り除くことが必要であるとみなす（1章4節）。震災での死が特に恐ろしいものではないと示すために、死においては死に方そのものは問題ではないこと（災害での死の特殊性の否定）と、身の安全に保証はなく人間は死すべき存在であること（運命の不可知性と死の不可避性）を1・2章において述べる。この二つの観点は交互に繰り返しながら述べられつつ、大地もまた不滅ではなく崩壊するという考え方によって架橋される。そのとき、恐怖の対象であった大地の裂け目は、大地もまた死すべき存在であるという慰めを導き出す。この展開の間に裂け目への恐怖と裂け目そのものを揶揄することで恐怖の軽減も図られる（2章）。さらに3章での、知らないことと慣れていないことが恐怖の原因となり恐怖を増大させるとの指摘から、31章までの地震のメカニズムの検討と大地の構造への言及もまた、恐怖を取り除く手段として読むことができる。

最終章32章では、死そのものを恐れるべきでないという主張に話題が転換される。上述の、地震と地裂に対する恐怖を軽減・払拭する説明・説得、言い換えれば実際の震災に端を発する具体的な恐怖への応答の展開とそこに用いられた表現は、死そのものを恐れるべきでないというこの結論的主張を準備していたといえる。特に32章4節では、ストア的な終末的状況下で平静に死んでゆくロールモデル的な存在である“命を軽視する者”が提示され、死そのものを平静に受け入れる姿勢が説かれる。そこでは“命を軽視する者”は裂け目のふちに恐れずに立ち、飛び降りるのであり、ここにおいて地裂へ落ちる死は、死そのものを恐れない姿勢と重ねて表されている。

紀元後4世紀半ばのアレクサンドリアにおける騒乱と「異教徒」

小坂俊介

本発表は、都市アレクサンドリアにおいて、特に紀元後4世紀半ばに生じた騒乱を考察の対象として、それに関わった「異教徒」とされる集団の実態を解明しようとするものである。ローマ帝国の諸都市ではしばしば暴力を伴う騒乱が生じた。とりわけアレクサンドリアで生じた騒乱については多くの史料が記録しており、本発表が対象とする紀元後4世紀半ばに関しては、皇帝権力と結びついたアレイオス派キリスト教

会による、ニカエア信条の擁護者アタナシオスとその支持者に対する暴力的抑圧の過程で生じた、またはそれを原因として生じた騒乱が知られる。本発表は第一に、356年の民衆による教会の襲撃と、それに伴い生じた騒乱を考察の対象とする。アタナシオスによれば、教会をアレイオス派に譲渡するようにとの皇帝の命令が発せられた数日後、帝国当局による教唆のもとで民衆が教会を襲撃し、略奪した教会の調度品を積み上げて燃やし、さらには牛を犠牲に捧げようとしたという。第二の考察対象は、357年に皇帝によってアレクサンドリア司教に任ぜられた、ゲオルギオスなる人物にまつわるいくつかの事件である。彼は司教就任後、同市にてアタナシオス派と「異教」を弾圧したとされており、358年には民衆の襲撃を受け、同市を離れた。彼は361年11月によろやく同市に帰還し、再び「異教」に対する迫害を実施するも、同月に後ろ盾であった皇帝コンスタンティウス2世が死去すると、民衆によって収監され、そのおよそ一か月後には騒乱のなかで殺害されてしまった。

これらの一連の騒乱に、キリスト教と「異教」との宗教的対立を見出そうと試みたのがCh. Haasである (*Alexandria in Late Antiquity*, Baltimore, 1997)。彼は同市の人々を、皇帝コンスタンティウス2世が指示したアレイオス派教会、ニカエア信条を擁護した司教アタナシオスとその支持者、そして非キリスト教徒とに分類する。その上で、非キリスト教徒のなかでもアレイオス派教会による伝統宗教の抑圧に不満を覚えた人々が「異教徒」意識を持ち始め、キリスト教共同体の拡大に対する抵抗を試みた、と考えた。Haasはそうした人々の「異教徒」意識を、騒乱における彼らの行動から読み取ろうと試みている。

本発表ではHaasが分析した史料、すなわち第一に同市の司教であり、時には騒乱を直接に目撃したアタナシオスの著作、第二に4世紀後半以降の教会史家による著作を改めて分析することによって、騒乱における人々の行動から彼らの「異教徒」意識を読み取ることが可能か否かを検証したい。また、この作業を通じて、近年進展著しいテーマである古代末期における「宗教的対立」と暴力の問題、さらには「異教徒」という集団のイメージが古代末期の諸言説のなかで形成されていった過程についても考える糸口を得たい。

ホメロスに見られる色彩世界の一局面——Argosを中心に——

西塔由貴子

「ἀργός」とは何だろうか。「白」か「銀」か？それとも光度か？もしくは「色」を示す語ではなく、単に明るい色合いの陰影表現なのだろうか？本発表では、詩人による色彩表現の使用、そして作品中におけるその色彩表現の文学的効果や象徴性を分析考察し、西洋古典の色彩世界の探究を試みる研究の一環として、「*shining, white, swift-footed, etc.*」(Liddell and Scott's *Greek-English Lexicon*, p. 236)、「輝く、白い、速い」(古川春風『ギリシャ語辞典』154頁)等々と一般に訳される ἀργός に着目し、ἀργ-ではじまる他の語と共に(例えば「銀」ἀργύρος (*white metal*) や「白く輝く」ἀργής (*bright, glancing, shining, white, etc.*) 等々)、物語の中に見られる ἀργός または ἀργ-

のイメージ、文学的効果と物語におけるその役割を考察する。これらを比較検討することによって、ホメロスの見方だけではなく、ギリシア文学またはギリシア人の精神についてもどう理解が深まるのか、を問題に据えて考えてみたい。

「銀の弓 (ἀργυρέοιο βιοῖο)」（*Il.* 1. 49）や「駿足の犬ども (κύνας ἀργούς)」（*Il.* 1. 50）、「銀の釘打った柄 (ἀργυρή κώπη)」（*Il.* 1. 219）（松平訳）等の表現が見られるが、それらがどのような文脈で使用されているのか、各々の場面に関連性はあるのか、物語の中でどのような役割を果たしているのかを整理・分析し、ἀργ- という表現について、少なくともホメロスでは、単に名詞を形容するだけの装飾品ではなく、文脈上で何かを象徴する働きがあることを提示する。色彩表現が持つ一貫したイメージとその各場面におけるビジュアル効果の存在から、詩人の物語作成の意図や技巧ならびに作品中に見られる色彩世界を垣間見ると共に、そこからギリシア人の「色彩」に対する感覚——彼らの眼に映る色彩——について発表者の見解を提示し、できれば新たな一側面の可能性を示唆することが本発表の展望である。

詩人は定型句表現を組み合わせて繰り返したただだから、その色彩表現には意味がない、ギリシア人の色彩感覚はおそらく存在しない、或いは非常に鈍いという見解を示した Gladstone (1858) を起点として、その後、詩人の創造性について多くの議論が行われてきた。近年は、文化的・社会学的に「色彩」の役割や象徴性を分析する方向にある (Bradley (2009))。発表者もこの傾向に賛同する立場であり、文学に留まらない様々な分野に反映されうる「色彩」の役割にも注目したいと思う。

プロティノスにおける時間論の一断面——「丸く動く」に注目して——

渡辺華月

プロティノス『エネアデス』第 45 論攷(III 7)「永遠と時間について」で展開されている時間論は、時間を「永遠の似姿」とする点でプラトンの発想に倣ってはいるが、さらに発展させて、時間を「魂の生」として説明している。つまり、魂は知性界での永遠の生にとどまり切れずに「先へ」動き出し、現に完全である知性の生の代わりに、将来において完全であろうと自分の新たな活動を順次に提供することで、自らを時間化し、時間を成立させたと言われる。魂の生に内的なものとして時間の本性が説明される。

また、時間の成立に関わるのが、個別者の魂ではなく、宇宙の動きや生成を統括している宇宙の魂であることから、宇宙生成とリンクさせて時間の成立について語られることが多いのもプロティノスの時間論の一つの側面である。本発表では主として宇宙論に関わる、時間論の側面に光をあてる。宇宙生成とリンクしつつ時間の成立について語られている記述で特に注目したいのが、この世界が、将来における「ある」をめざし、「ある」への一種の欲求のために「丸く動く」と言われている箇所(III7 [45]. 4. 28-33) である。この箇所の「丸く動く」をアームストロングは恒星天の回転運動を意味すると解釈する(Loeb 版英訳訳註による)が、マックガイア及びビストレンシは、時間的な移行に即した動きを、可視的な円運動として読み込むことに異を唱える(McGuire, J.E. & Strange, S.K. (1988) "An Annotated Translation of Plotinus *Ennead* iii 7: *On Eternity and Time*," *Ancient Philosophy*, 8, p268 n.47 参照)。

「丸く動く」動きとは何か？可視的な円運動を意味しているのでなければ、何らかの動を比喩的に「丸く」と言っているに過ぎないのか？発表者は「丸く動く」ということは、単なる比喩ではなく、かと言って恒星天の可視的な回転運動に限定されるものではなく、恒星天の回転運動を含む宇宙一切の生成が一定の周期に従って生起することを含意しているとみる立場をとる。その裏付けを試みるのが本発表の目的である。

第45論攷(III 7)を主要テキストとして、以下の手順で考察する。「永遠」の内容を整理したうえで(第一章)、「魂の生」としての時間そのものと「時間の内にある感性界」との間にある距離を問題点としてとりあげ(第二章)、その距離を埋めるのに重要な働きを担うものとして「ロゴス」に注目し(第三章)、プロティノスの時間論が、ロゴスに従う周期的回帰を想定する宇宙論の基礎づけとなっていることを明らかにする(第四章)。以上の手順を経たうえで「丸く動く」のもっている意味内容を示唆したい。

アリュバロス・タイプの盛衰 ——アルカイック時代の墓碑における運動選手像の変遷

田中咲子

古代ギリシアの墓碑には、市民像や兵士像と並んで、運動選手像がしばしば表わされた。アルカイック時代からクラシック時代にわたって、運動選手像は墓碑の主要図像の一つであった。

この図像が古代ギリシアの墓碑に初めて現れたのは、現存作例から、前560年頃と考えられる。初期のものはいずれも競技用具を持つ姿で表わされており、発表者はこれを「競技者タイプ」と名づけた(田中2002)。その後、約20年おきに新たなタイプの運動選手像が登場した。すなわち前540年代になると、香油用の小瓶アリュバロスを持つ図像が成立し(「アリュバロス・タイプ」田中2012)、そしてさらに前520年頃、陶器画の少年愛図におけるエロメノス像と同様の図像的特徴を具えた人物像が、墓碑に表わされるようになる。すなわち少年が、鶏や兎といった小動物や、花冠、花などを持つ(この第三のタイプを、発表者は「エロメノス・タイプ」と名づけた)。

なぜ、運動選手像にこうした変化が生じたのか。これらの変遷は、社会の価値観や人々の思考方法の変化を反映しているのか。発表者はこれまでに、競技者タイプとアリュバロス・タイプに関して、成立要因について考察してきた。とりわけ後者、アリュバロス・タイプについては、成立過程を明らかにしたと同時に、成立後約20年すると衰退現象がみられるようになることを指摘した。この時期は、第三のタイプ、エロメノス・タイプの成立時期に重なる。本発表では、アリュバロス・タイプの衰退現象に着目し、エロメノス・タイプの成立との関連をふまえて、衰退の原因を明らかにしたい。

発表ではまず、アリュバロス・タイプの成立背景とその年代分布を確認する。次いで、エロメノス・タイプについての図像的特徴の検討を通じて、本タイプの命名の妥当性について論じる。そして、このタイプが陶器画を母体に形成されたことを指摘する。その上で、アリュバロス・タイプが衰退した背景について考察する。具体的には、陶器画におけるアリュバロスの描写が変化したことから説明できると考えられる。すなわち

前 6 世紀末以降、黒像式においても赤像式においても、アリュバロスの持ち主や持ち方、場面などにおいて、従来とは異なる描かれ方がされるようになった。これに伴って、アリュバロスが担っていた意味も変化したことが想定される。

アリュバロス・タイプは前 5 世紀になると再び隆盛期を迎え、三つの運動選手像タイプのなかで最も主流のタイプとなる。今後その繁栄の理由を探るためにも、本発表において、前 6 世紀末の一時的な衰退の意味を明らかにしたい。